

鎌倉時代の医療では、忍性、榮西、性全の三人を挙げなければならぬ。残念な事に本書では忍性の名はでてはいないが記載がなく、したがって彼の名言も見られない。「茶は養生の仙薬なり。延齡の妙術なり。」と唱えた榮西は宋から茶を輸入し、源実朝の二日酔いに茶を勧めると同時に『喫茶養生記』を進呈し茶を我が国に定着させたことで有名である。「慈心ノ心ヲ以テ……」の梶原性全は仮名書きの『頓医抄』と漢文の『万安方』を著しここに描かれた内景図は我が国最初のものとなる。

レオナルド・ダ・ヴィンチ、アンブローズ・パレ、ウイリアム・ハーヴェー等の描写も手慣れたものである。

「日本医学中興の祖」と称せられた曲直瀬道三は若くして田代三喜に巡りあい、のち京都へでて啓迪院を作り弟子を教育した。李朱学の長所を取り、「慈仁」を我が言葉とした。毛利元就、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康らの武将からも尊敬されたという。道三の啓迪集は甲斐の永田徳本にも継承され、徳本は患者の貧富には関係なく一服十八文の薬で医療をしたと伝えられる。彼の「医弁」には「万病利ツカエテ……」の名句がある。

江戸時代鎖国下の日本へ危険をおかし蘭官医として来日した外国人の数は少なくないが、その代表とされるのはケンペル、ツェンペリー、シーボルトの三人である。この三人は時代も少しづつ異なり、来日の目的も違っていたが、日本に西洋の文化をもたらし、日本を世界に紹介した点ではいずれ劣

らない。ケンペルは元禄の平和日本で、將軍綱吉から「長寿の秘薬はないか」と聞かれ、ツェンペリーは梅毒の水銀療法を初めて日本人に教え、シーボルトは植物学、動物学その他もろもろの研究をしたことが本書にも述べられているが、この三人の比較研究も大変興味深い。

字数に制限があるため、本書の最後部に見られる人物(貝原益軒、賀川玄悦、「医は意なり」良沢、玄白、関寛斎、ナイチンゲール、ヴィルヒョウ、パスツール等)のコメントは割愛した。本書を座右に備え、直接玩味される事を希望して攷筆する。

(大滝 紀雄)

〔中央公論社・東京都中央区京橋二一八―七、電話〇三―三三五
六三―一四三一、一九九五年十月発行、A5判、二六〇頁、定
価一、八〇〇円〕

西山茂夫監修

『皮膚科の病名由来ア・ラ・カルト』I、II

平成六年八月某日、長門谷洋治先生より『皮膚科の病名由来ア・ラ・カルト』をいただき(正式にはIは入っていないが、ここでは便宜上捜入した)、続いて七年十一月八日に続編たるIIをいただいた。

両編とも西山茂夫名誉教授(北里大学)の監修の下に、○今泉孝、○小野公義、○蔵方宏昌、○小泉雄一郎、○長門谷洋治、前田学、藤岡彰の諸先生の執筆(右肩の○印は本学会々員を示

す)により、夫ぞれ六十項目の病名が取り上げられている。

Iには、あざ、あせも、アトピー、アフタ、泉熱、いば、いれずみ、うおのめ、疥癬、かさぶた、花柳病、乾癬、頑癬、柑皮症、汗疱、強皮症、菌状息肉症、くも状血管腫、黒なまざ、下疳、ケルスス禿瘡、ケロイド、コンジローマ、さめはだ、湿疹、紙幣状皮膚、しみ、しもやけ、酒皰、猩紅熱、白なまず、蕁麻疹、せつ、象皮病、そばかす、苔癬、たこ、丹毒、天疱瘡、とこずれ、とびひ、とりはだ、にきび、肉芽腫、はしか、はたけ、薔薇疹、ひょうそ、風疹、ふけ、粉瘤、ヘルペス、ほくろ、水いぼ、みずぼうそう、みずむし/いんきんたむし、ものもらい、よう、らい、狼瘡が入り、IIには、あせものより、あはた、鞍鼻、膿、壊疽、エプーリス、潰瘍、かぶれ、ガマ腫、肝斑、丘疹、魚鱗癬、亀裂、結核、結節性紅斑、血友病、硬結性紅斑、紅色陰癬、紅斑性狼瘡、紅皮症、黒色表皮腫、さ、くれ、さし爪、ザルコイドーシス、獅子面、しらくも、脂漏性皮膚炎、水瘡、ストロフルス、線維性軟疣、足菌腫、帯状疱疹、蝶型紅斑、手足口病、癩風、膿痂疹、囊腫、ノルウェー疥癬、梅毒、稗粒腫、白癬、白板症、癩痕、ひぜんだに、火だこ、皮膚腺病、ぶち症、ペラグラ、べんち、蜂窩織炎、黒子、母斑、まき爪、面疔、面疱、蒙古斑、疣贅、痒疹、鱗屑、わきが、が入っていて全百二十項目である。

今日、インフォームド・コンセントの必要性が重視されている中で、皮膚病診療の際に病名のもつ意味を正しく患者に理解してもらわないと話はずすまない。皮膚科の病名は医学

生に記憶させるだけでも難かしい作業であるから、患者に理解をうるのはそれ以上に大変である。

そのような背景をふまえて、経験豊かな西山教授が現役を引かれる直前に、この本の企画編集を立案されたことにまず敬意を表したい。この本は外来でインフォームド・コンセントを成立させる調味料として役立つと考えられる。かかる観点から云うと、看護婦、医学生、薬剤師、研修医、他科の医師にもぜひ読んでもらいたい本である。読む意欲がわくようにカバーも色あざやかにし、マンガ風のコックの絵も本書のねらいを良くあらわしていると思う。

内容についてであるが、序文にもあるように方言と標準語の差は大切な問題で、蕁麻疹を西の方ではホロセと呼ぶ人が多いから、もし改訂版を出される折には、方言の代表を加えていただきたい。方言の同義語についてみると、項目によって量の差が目立つのは残念である。

IIの方に出てくる「ぶち症」は、先天性の限局性白皮症のことだそうで、関東では耳なれない病名である。俗称ではないそうだから私の学問の浅さを恥るが、略字、かな書き、方言、俗称と出てくると、本当にこのような作業は難しいと思う。

この二冊に登場しない疾病に円形脱毛症があり、目新しいものとしてエプーリス(歯肉腫)があり、死語に近い花柳病も取りあげられている。疥癬関係が三項目というのもバランス感覚という点では如何なものか、ぜひ工夫してほしかったと

思う。

上手の手から水がもれるという譬えのごとく、コンジロマの項に、ラテン語に誤りがある点を指摘しておきたい。

弱点のみ書いたようになったが、いろいろと便利な冊子であり各方面におすすめる次第である。

(中西 淳朗)

(協和企画通信KK・東京都港区新橋二一〇一五、新橋駅前ビル一号館二階、電話〇三―三五七五―〇一八一、Iは九四年六月刊、一三二頁、IIは九五年十月刊、一三三頁、共に新書判、いずれも定価千二百円)

松下正明編

『続・精神医学を築いた人びと』(上・下)

これは本誌第三八巻第四号(一九九二年)にわたしが紹介したものの続篇で、前著の好評にはげまされて編集したものである。今回とりあげられているのは、モレル、カールバウム、マイネルト、ジャクソン、モーズレイ、ロンブローゾ、クラフトーエービング、ベルネーム、パヴロフ、榊徹、プロイラー、ワグナー・ヤオレック、ジャネ、ジーマン、アドラー、ガウプ、ベルガー、ウイلمانズ、森田正馬、今村新吉、エコノモ、三宅鑑一、グルーレ、ピンスワンガー、ヤスパース、ミッコフスキー、林道倫、下田光造、丸井清泰、クレッチマー、サリヴァン、内村祐之の計三二名。編者によれば、論文が加れた主要言語でわけると、前著とあわせて、日本一四名、

ドイツ語圏二七名、フランス語圏九名、英米語圏六名、ロシヤ語圏三名、イタリヤ語圏一名という。

対象の選択の困難にまして、書き手の選択はさらに困難であったろう。それらを克服して、これだけのものにしあげられた編者のご苦労には脱帽するばかりである。編者が意図しながらいれられなかったコノリー、マイヤーなどはぜひよませてほしかった。日本への精神分析導入については、丸井よりは古澤平作をとりあげるべきだった(索引で古澤の名がFの項にはいつているのは情けない)。変質論、ウイーン大学に精神医学の二講座があつた件など、もつとも興味をもつてよませていただいた。後者は、松沢病院の院長をめぐって東京府と精神病学教室とのあいだにおもわくの食い違いがあつたことをおもいださせた。

ところで、一人につき一五頁前後の評伝となると、伝記の基本的事項はきつちりおさえてほしいものだが、この要請は充分にはみたされていない。生没については月日までいれてほしいが、生没の年を本文中にしるしていないものがある。わたしは外国の事情にうといが、たとえば、研究者として著名な夫人の姓を誤記しているものもある。もう一つ気がついたのは、ハイフンでつながれる二重姓の扱いである。それをハイフンをおとしているために、索引では二重姓のあとのものででている。ワグナー・ヤオレックも、年表の論文はヤオレック姓になっている。そのほか、わたしのとぼしい知識からしても、たりぬ記述、あるいは年の誤りがいくつか目につ